

〔三下り〕 勢いきほひ和朝わてうに名なも高たかき、曾我そがの五郎時致ごろうときむねが、逆沢瀉さかおもだかの鎧よろひてふ、裳裾もすそにすがる鶴つるの丸まる、素袍すはうの袖そでをかき撫なでかき撫なで

とめるは鬼おにか小林こばやしの朝比奈あさひなならぬ優姿やさすがた、女をんなの撚よれる黒髪くろかみに、ひかれて止とどまる心こころならやらじと引ひけば時致ときむねは、日頃ひごろの本望父ほんまうちちの仇あだ、妨さまたげなすなと突飛つきとばし、廓くわわの洒落しやれとは違ちがふぞよ、放はなせ、とめた

〔口説き〕 とめてよいのは朝あさの雪ゆき、雨あめの降ふるのに往ゆかうとは、そりや野暮やぼぢやぞへ待またしやんせ起請誓紙きしやうせいしは嘘うそかいな、嘘うそにも洒落しやれにも誠まことにも、他所よそに色いろます花眺はなながめ、

そしてだましてそれぞれ其その顔かほで恐こはいこと言うて腹立はらたてさんす

そちら向むかひに居ゐさんしても、顔見かほみにやならぬ末すゑを頼たのみの通かよふ神

かよはき少将朝比奈せうしやうあさひなが力ちからは素袍すはうの袖そで添そへて、互たがひに劣おとらぬ有様ありさまは、貴賤上下きせんじやううげおしなべて、

感かんぜぬものこそなかりける